

# 八幡平の四季のご紹介



八幡平マウンテンホテル 自然ガイドステーション **高橋 基世**

## ◆八幡平はこんなところ

『八幡平』と書いて『はちまんたい』と読みます。

山の形はなだらかで、オオシラビソの森の中に山頂があります。登山口から山頂までの標高差は約70m。登山というよりは『散策』という言葉が似合うお山です。

昭和31年に十和田八幡平国立公園に追加指定されており、標高は1,613mと高くはないものの、植物の種類の多さが魅力です。日本百名山や花の百名山にも選出されており、2時間半ほどの散策で数十種類の高山植物に出会うことができます。

登山道からは岩手県の最高峰・岩手山(2,038m)、早池峰山(1,917m)、青森県の岩木山(標高1,625m)、八甲田山(1,585m)、秋田県の秋田駒ヶ岳(1,637m)、秋田と山形にまたがる鳥海山(2,236m)などを望むことができます。

八幡平の語源はアイヌ語の『バツ オマンルタイ』(意味は『稜線の上の神秘の森』)からきているといわれています。

す。まだこの地に大和朝廷の力が及ばなかった時代から八幡平は自然に恵まれた豊かな土地だったことがうかがえます。

岩手県にはほかにも盛岡・沼宮内・安比・釜石など、アイヌ語が語源とされる地名が残っています。

伝説では『八幡平』の名付け親は坂上田村麻呂といわれてきました。

『坂上田村麻呂がこの地に棲む鬼を討伐するため八幡平の地を訪れた際に、その美しさに心打たれ、八幡神を祀って戦勝祈願をしたことから八幡平と名付けられた』

しかし歴史は勝者の視点から語られるもの。追いやられた『鬼』は鬼と語られているけれど、実際は平和に暮らしていたアイヌの人々だったのかと思うととても切ない気持ちになります。今も残る地名が時を超えて『ここにわたしたちが暮らしていたんだよ』と言っているような気がします。

## ◆春

八幡平の春は雪が解けたところから、まだらに始まります。

雪解けが進むにつれて麓の方からブナやダケカンバの新緑が山肌を上ってきます。まるで『春』が目に見えるようです。残雪の白と柔らかな緑のまざりあい美しい、春の訪れを感じさせる景色です。



高山植物が彩る八幡沼



新緑の八幡平の山並み

八幡平は1年の半分が冬といってもいいくらいで、長く雪に閉ざされます。山の植物も動物も麓に暮らす人間も春という季節には希望のような、憧れのような気持ちを抱いているように感じます。あたたかな陽ざしが山々を包み、山菜が顔を出すころはみんなお山に繰り出さずにはいられません。

5月、木の上からは、エゾハルゼミの声がシャワーのように降り注いできます。森の奥からはポポッポポッとツツドリのさえずりが聴こえます。



〈エゾハルゼミ〉  
 虫販売と付きますが、  
 北海道から九州まで分布  
 しています。八幡平では  
 標高400m～1,000m付近の  
 森の中で暮らしています。  
 体長3.5cm程の小はなせです。

エゾハルゼミ

道路沿いでは雪から顔を出したばかりのひよこのような黄色いフキノトウのとなりで1メートルほどにも成長したお化けフキノトウが綿毛を飛ばしています。

雪のある場所と無い場所では季節の進みが全く違います。フキノトウには雄株と雌株があり、雌花はどんどん成長して姿を変えていくので地元では『ぼっけ』（『化ける』の意味）と呼ばれています。



フキノトウと成長したフキノトウ

<sup>ねまが</sup>根曲竹と呼ばれる、チシマザサのたけのこは春のごちそう。山の生き物たちも食べに来ます。山を歩いていると竹藪からガサガサと音が聞こえ、慌てて『クマさんですか〜?』と声を掛けると『おーい』と返事が返って来てほっと胸を撫でおろすことも度々あります。このあたりでポピュラーな山菜のボウナ（ヨブスマソウ）、コシアブラ、ウドなど次々と顔を出します。



ボウナ



ウド

麓の街の桜が咲き終わるころ、山ではミネザクラという高山性の桜が咲き始めます。麓では4月中旬にソメイヨシノが開花しますが、八幡平の中腹から山頂では6月までお花見が楽しめます。ミネザクラは場所によって開花時期にひと月ほど差があり、日当たりのいい車道際は果実（サクランボ）になりかけていて、すぐ近くのくぼ地ではまだつぼみという光景もよく見かけます。



ミネザクラ

## ◆ドラゴンアイ

5月下旬から6月中旬にかけて、八幡平山頂へ向かう登山道の途中にある『鏡沼』が大勢の観光客でにぎわいます。『八幡平ドラゴンアイ』が見ごろを迎える季節です。

鏡沼は大昔の噴火口に雪解け水が溜まってできた、直径50メートルほどの円い火口湖です。沼の雪解けによって目玉のような模様が浮かび上がります。2016年の春、この光景を目にした台湾の旅行者がつけた名前が『ドラゴンアイ』です。

きっと何百年ものあいだ、数えきれないくらいの人がこの景色を見てきたと思うのですが、この旅行者のネーミングセンスと現代のSNSという文明の利器が揃っていたことで世界中に知られることになりました。30年前だったら、知られることはなかったかも知れませんね。

中心に水が溜まることを『開眼』と呼びますが、その後10日ほどでドラゴンアイはもとの沼に戻ってしまいます。



八幡平ドラゴンアイ

## ◆鬼界アカホヤフテラ

八幡平山頂周辺に散らばる火口湖は太古の八幡平の火山活動を物語っていますが、八幡平にはもう一つ別の火山の痕跡が残されています。それは、八幡平からおおよそ2,000kmも離れた鹿児島島の鬼界カ

ルデラの火山灰です。今から約7300年前、現在の九州と沖縄の間で世界でも稀にみる大規模な海底火山の爆発がありました。この噴火によってできたカルデラが『鬼界カルデラ』です。この時に舞い上がった火山灰などの粉塵を『アカホヤ』と言います。これまで、八幡平へは届いていないといわれてきましたが、近年、八幡平にもこの粉塵の層が存在することが明らかになりました。遠く九州で起きた巨大噴火の痕跡が八幡平にも届いているなんて、自然の力にはほんとうに驚かされます。

## ◆夏

八幡平で雪のない季節は6月下旬から10月までの約4カ月。10月の中旬に雪が降ることもあります。

八幡平の夏は一瞬。春と夏・夏と秋が混ざり合っているような印象です。

この短い季節に植物たちはこぞって花を咲かせ、1週間経つごとに花の種類が移り変わります。



ニッコウキスゲの群落

早春の花であるミズバショウは6月頃に咲きます。

尾瀬ヶ原湿原の夏の景色を歌った『夏の思い出』の歌詞をご存じでしょうか？

歌の中にミズバショウが登場します。作者の江間章子氏は子ども時代をお母様の出身地だった平館村（現在の八幡平市平館）で過ごしています。6月といえば麓では汗をかくくらいの陽気です。そんな季節に咲いていたミズバショウの花は彼女には夏の花として記憶されたのかもしれない。



ミスバショウ



八幡平の高山植物

#### ◆アサギマダラ

夏の盛りともいえる7月下旬ころにはアサギマダラに出会えるかもしれません。

羽を広げた大きさは5～6cmほど。あまり羽ばたかず、風と空気の流れに身を任せてふわふわと優雅に花の間を舞っています。羽の白い（実際には半透明の水色）部分に陽が当たると、浅葱色（青緑）に輝くことからその名があります。

アサギマダラは日本や台湾、朝鮮半島で生まれ、自分の好む花を求めて旅をする渡り蝶です。

その一部が夏の八幡平にもやってきま

す。中には2,500kmも移動した記録もあります。

蝶には種類ごとに食草（好みの草）があるのですが、八幡平のアサギマダラの場合はヨツバヒヨドリの蜜を吸っています。八幡平で産卵し、翌年生まれた蝶はまた日本各地へ旅をします。



ヨツバヒヨドリの蜜を吸うアサギマダラ

#### ◆秋

8月に入ると八幡平山頂周辺は秋の雰囲気漂い始めます。麓はまだまだ暑いのですが、お山の上の空気は冷たく、花はリンドウがメインになってきます。そしてシラタマノキ（白玉の木）、ツルリンドウ（蔓竜胆）、ツルコケモモ（蔓苔桃）など、様々な色の実が目を楽しませてくれます。

シラタマノキは夏にスズランのような白い花が咲き、名前の通り真っ白な実をつけます。果実にはサロメチールという、湿布薬に含まれるものと同じ成分があり、潰すとハッカの様な爽やかな香りがします。



シラタマノキ

リンドウは日本国内だけで30種類以上があるといわれています。リンドウの味はものすごく苦いため、苦さで有名な熊の胆に勝る苦さという意味で『竜胆』という文字が当てられています。

数ある中で一風変わっているのがツルリンドウです。蔓を伸ばして地面を這い、周囲の草木に絡まって育ちます。花は薄紫であり目立ちませんが、秋には宝石のルビーの様な赤く美しい実をつけます。この実は冬のあいだ雪に埋もれますが、春になってもその色と形をとどめています。



ツルリンドウ

ツルコケモモは蔓になって湿原を覆っています。『ツルコケモモ』と聞いてもすぐには浮かんでこないと思いますが、『クランベリー』という名前は聞いたことがあるのではないのでしょうか。ドライフルーツにして売られています。クランベリー cranberry のクランの語源は英語で鳥の鶴 (crane) のことです。ツルコケモモの花の形が鶴の頭に似ていることからこの名があります。ちなみに重機のクレーンも語源は同じです。なんとなく鶴に見えてきませんか？



ツルコケモモ

子どものころ祖母から聞いた話ですが、私の祖父は若いころ (100年近く前) 船の乗組員としてサハリンに行ったことがあるそうです。サハリンの港町には民家のすぐそばからはるか遠くまで木がほ

とんど無い広い野原が広がっていたそうです。そこにはコケモモが一面に実っていて、人々は夏にその実を摘んで樽に貯め、ワインのような飲物を作るのだそうです。寒さがきびしく冬場は野菜が穫れなかった当時のサハリンではこのコケモモの飲物でビタミンを摂っていたのです。どんな味がしたのだろうか？ 祖父の見たサハリンはどんな景色だったのだろうか？ 行くことが叶わない異国の地に興味が尽きません。

八幡平の紅葉は湿原の周りの草紅葉に始まり、10月中旬には中腹のダケカンバやナナカマドの紅葉にバトンタッチしていきます。麓が錦に染まるころ、山頂周辺は草紅葉も終盤。植物たちがひっそりと雪を待つ、小さな話し声が聞こえてきそうです。



草紅葉の様子 (黒谷地湿原)

#### ◆ブナ

八幡平の中腹にはブナ林が広がっています。ブナは森に降った雨や雪の水分を森に蓄えてくれます。そばの実を大きくしたようなブナの実には別名『蕎麦栗』『稜栗』(『稜』には角立っているという意味があります。) と呼ばれます。森の動物たちの大切な食料になっています。中には人間が食べても美味しいナッツが入っています。くるみに似た味がします。

ブナには芽吹くと周りに落ちた実の成長を抑制する成分を出す習性があり、密生になることを自ら防いでいます。言葉を持たずとも植物が目的をもって思考していることに驚きます。

ブナを表す漢字に『樨』があります。『木としての価値が無い』という意味です。

樵材は乾燥が難しいため狂いやすく、木材として使いにくいことからこの漢字が生まれたといわれ、一時期は価値のないブナの森をどんどん切り開き、草地や杉の植林に変えていった時代があります。

しかし、この漢字にはもう一つ別の思惑が隠されているという話も聞きます。ブナの保水能力や自然の中での大きな役割を理解していた昔の杣人（林業を生業にする人）たちが、ブナをいたずらに切らせないためにわざと価値がないような名前を付けたという説です。ひとつの説にすぎませんがもし、本当だとすれば昔の人々の思慮深さ、賢さに頭が下がります。ブナの大切さが理解され、世界遺産として守られるようになったのは最近になってから。今ではブナは森の生き物や私たちの暮らしを守り、美しい新緑や秋の陽ざしに照らされる黄葉を楽しむことができます。自然の中に役割や価値を持たないものなど無いのだと考えさせられます。



ブナの巨木とブナの実

#### ◆きのこ

木の種類の多様な八幡平ではきのこの種類も豊富です。色も形もユニークなものばかりで、観察するだけでとてもわくわくします。

ホコリタケという種類のきのこは成熟

するとお団子の真ん中に穴が開いて雨粒が落ちた衝撃で胞子を吹き出します。子どもたちが見つけると指でつついて遊ぶのですが、まんまときのこに利用されていると言えそうです。



ホコリタケ

タマゴタケは真っ赤な傘と黄色い脚が印象的なオシャレなきのこ。まさにたまごのような白い球が割れてきのこが出てきます。派手なきのこには毒の印象がありますが、タマゴタケは例外です。地元ではきのこ粥や塩焼きにして食べられています。でも、世の中には似た色のきのこもありますから、野生のキノコを食べるときには十分にお気を付けください。



タマゴタケ

わたしの4歳の息子はまるで絵本の「こびとづかん」に出てくるこびとでも探すような感じできのこを探して遊んでいます。見つけてはつついてみたり、話しかけてみたり、「おうちに連れて帰って育てる」と言って楽しんでます。大人はついつい『きのこの価値 = 食用 or 毒』『植物の価値 = 美しい or 雑草』のように色眼鏡でとらえてしまいがちですが、小さい子どもは人間の世界と自然に境界がなく、自然を身近な存在に感じているような気がします。わたしもそうでありたいと思います。

## ◆冬

あまり知られていませんが、八幡平の樹氷の数は日本一多いと言われてます。白い帽子をかぶってたたずむ岩手山に向かって見渡す限りの樹氷原が広がります。岩手山の肩にうっすらと見えるのは日本百名山の早池峰山です。山頂付近の樹氷は最も成長していてまさにモンスター。怪獣の背中のようなです。歩いていけば暑いくらいですが、少し休むと頬が寒さでぴりぴりしてきます。厳冬期の八幡平には夏とは違い、容易に人を寄せ付けない厳しさが感じられます。

冬季は車で登れるのは岩手側も秋田側も中腹まで。ゴンドラなどのインフラが無いので、樹氷を見に行くためには往復6時間以上歩かなければなりません。ぜひ専門ガイドと一緒に楽しみください。



八幡平の樹氷原



八幡平山頂付近の樹氷

## ◆オオシラビソ（アオモリトドマツ）

樹氷が出来る為に欠かせないのがオオシラビソです。岩手県ではアオモリトドマツ、秋田では緒檜もろびと呼ばれています。長野から青森までの高山に自生する日本の固有種です。八幡平はオオシラビソの生育数日本一の山でもあります。

秋田のマタギの間では山の神様はオオシラビソを燃やした煙の香りを好むといわ

れており、猟で山に入る前にはこの枝を燃やした煙で身を清め、魚のオコゼの干物を備える風習があります。山の神は女神さまでとても醜い顔をしており、自分より醜いオコゼを供えると喜ぶのだそうです。



お供え物のオコゼ

オオシラビソにはフィトンチッドというリラックス効果のある成分が含まれており、葉をたたくと青みかんのような爽やかな香りがします。森を歩いていると爽やかな気分になるのにはフィトンチッドが関係しています。

八幡平のオオシラビソは非常に成長が遅く、芽吹いてから実をつけるまでに30～50年ほどかかるといわれています。強風の吹きすさぶ厳しい環境に生育するため、その寿命は200年ほどといわれ、樹木の中では短命です。いつまでも樹氷が見られるように、大切に守っていききたいですね。



雪に埋もれるオオシラビソと青い球果

◆自己紹介

わたしは八幡平市のお隣、今は盛岡市になった旧玉山村の生まれです。八幡平の麓にある『八幡平マウンテンホテル』にフロントスタッフと登山ガイド兼任で勤務しています。

実家の周りは田んぼと里山。子どもの頃の遊び場はもっぱら田畑や近くの森の中でした。

水路でドジョウやアカハラを捕まえたり、オタマジャクシを飼ってみたり、山でつけた木の実やキノコが食べられるのかどうか気になって、家に持ち帰っては図鑑とにらめっこしながら絵を描いていました。

今でも当時と同じように山の中で見た様々な植物や生き物について調べることが好きで、ときどき絵を描いています。写真やイラストとともにお山や植物やきのこなどについて紹介する『基世のお出かけ日記』をマウンテンホテルのロビーで公開しています。お越しの際にはお手にとっていただけると嬉しいです。



基世のお出かけ日記

◆八幡平マウンテンホテルのご紹介

少しだけ『八幡平マウンテンホテル』についてご紹介させていただきます。

八幡平マウンテンホテルは八幡平の麓に位置しています。岩手山や紅葉で有名な三ツ石山の登山口からも近く、夏場はトレッキングの拠点として、冬場はスキー場も営業しておりますので、ウィンタースポーツを楽しむお客様でにぎわいます。日本山岳ガイド協会認定ガイドも在籍しており、観光やトレッキングコー

スのご相談にも応じます。スキー場は2か所あり、ホテル直結の『パノラマスキー場』は緩斜面が初心者の方やご家族連れに人気です。ツリーランや急斜面を楽しみたいお客様向けの『下倉スキー場』へはホテルから無料シャトルバスで10分の距離です。ベストシーズンは1月中旬から2月。極上のパウダースノーを楽しむことができます。八幡平へお越しの際には四季を通じて豊かな自然と温泉を満喫できる当館へ、ぜひ遊びにいらしてください。



八幡平マウンテンホテル



パノラマスキー場



下倉スキー場

八幡平マウンテンホテル

〒028-7302

岩手県八幡平市松尾寄木1-509-1

TEL : 0195-78-4111

E-mail: info@trs-h.com

HP: www.hachimantai.co.jp